〔巻頭言〕

心理臨床の基本的態度に関する「言葉」

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科　井　手　正　吾

クライエントや患者という，なんらかの心理的・精神的な痛みや苦しみに耐え忍んで病院や相談室に来る人に対して，基本的にどのような態度で関わっていけばよいのであろうか。多くの臨床家が異なる立場からいろいろなことを論じているように思われるが，短い言葉にまとめられることが多い。まったく違ったようなことを言っているようにも，似たようなことを言っているようにも思われる。今でも取り上げられているが，私が心理臨床の途についた30年ほど前から述べられている基本態度に関するいくつかの言葉についてあまりまとまりなく連想を拡げてみよう。

心理臨床での基本的な態度というと，ロジャーズ ,C.R.の「無条件の肯定的配慮」「共感的理解」「純粋性」という３つの態度があげられるだろう。今でも心理臨床のテキストには取り上げられているが，私が心理臨床をはじめた頃は,来談者中心療法のブームでもあり,まるで水戸黄門の印籠のような様相であった。ひねくれ者の私は，言葉だけを飾った非常に古くさい修身のような精神訓のように感じ，非常に強い反発を覚えた。それで，精神分析的な知識や技術というものを求めていった。ロジャーズのこの基本的態度は，今でこそ，講義などで基本的な概念として扱ったりしてそれなりに理解できるが，いまだ個人的には好きになれない言葉である。

サリヴァン，H.S．のいう “participant observation” は，かなり有名なところであろう。心理的に病んだり苦しんでいる人に対して，一体になるような感覚で寄り添いながらも，距離をとって冷静に注意深くみて察していく。非常に短い言葉であるが，人間の心理的・精神的な問題に関わっていくための専門家の基本的姿勢を示している。そしてまた，その難しさや複雑さをもあらわしている言葉でもあり，よく取り上げられるのも納得できる。私の好きな言葉のひとつである。

しかし，サリヴァンといえば，もっと気にいっている言葉がある。それは，サリヴァンが，繰り返し使っている「我々は何よりもまず同じ人間である」という言葉である。一見，博愛主義，人類愛に満ちたような言葉にきこえる。しかし，この言葉をサリヴァンは schizophrenia との精神療法的な関与，理解という文脈で用いている。schizophrenia は，サリヴァンが活躍していた当時，否，今でもそういうところがあるが，心理療法的な関与や理解は無理，あるいは難しいと考えられていたし，また，サリヴァン自身もそれほど安易なものではないことを十分に認識していた。そのような背景を考えると，この言葉は類似性と独自性をもった人間への臨床的な基本的態度として重みを感じてしまう。

心理臨床の原点であると私は思っているフロイト，S.をやはり取り上げたい。フロイトで基本的な態度といえば，禁欲的な中立性や「平等で漂うような注意」が専門的な用語としてあげられるかもしれない。しかし，やはり30年以上も前に知り，いまだにひきずっているものとして，フロイトが言ったと伝えられる “love and work” という言葉がある。これは精神的な健康についてたずねられた時のフロイトの応えとされているが，臨床家の基本的な態度に通じるものでもあろう。あまりに簡明で日常的な言葉であり説明もいらないような言葉であるが，逆に，それだけ奥深いものを感じるところである。

年をとると昔の若き日が思い出され，そして自分の成長のなさも痛感する。臨床とはやはり難しい。でも，だからこそ面白くもある。何事も基本に始まり，基本に終わるのであろうか。